ISSN 0385－9517

史料報報

第53号
平成2年9月

「房総史料調査会」の活動について

立野　晃
（房総史料調査会会員・千葉県鎌ヶ谷市郷土資料館学芸員）

「房総史料調査会」は、千葉県内を主要なフィールドとして史料調査活動を行っている会である。周知のように、近年、史料調査については、自治体や大学等様々なレベルで行われている。その中において、本会は、その構成および活動内容等においてユニークな存在と思われる。小稿では、その概略を紹介してみる。

一、発足の理念

本会の正式な発足は一九八六年三月で、本年で丸四年が経過している。成立時に、「『房総史料調査会』の設立にあたって」という呼び掛けが会誌『紙魚之友』第一号を通して行われた。以下に、やや長文となるがその全文を掲載してみる。

いま、日本の社会構造と国土は急速に変容しつつあります。その中で、私たちが過去から受け継ぎ、未来へと伝えるべき無数のかけがえのない文化遺産が、日に日に破壊され、消滅しています。私たち歴史学に関心をもち、学ぶものにとって、身近の地域社会に残された文献や民俗等の史料群を散逸や破壊から護るよう努力することは、とりわけ重要な課題であり、かつ義務でもあるのではないでしょうか。このことは、私たちがくらし、働き、学ぶ、この千葉県では、他の地域に比べて、より一層緊急の課題であるように思われます。勿論、県をはじめ多くの市町村や大学・諸研究団体等による貴重な努力がつみ重ねられてきていますが、調査や整理をめぐる科学的方法、保存や公開のための方法・施設・機関、調査に携わりうる人材のプールや養成等の諸点で、まだまだ遅れているのが現状ではないでしょうか。こうした状況を少しでも克服するためのささやかな試みの一つとして、様々な分野の人々からなる、民間の自主的な史料調査活動・保存活動が独自に行われることが大切ではないかと考えます。自治体や大学などの枠組をこえた、オープンで民主的な史料調査活動・研究活動。私たちの身近な地域社会に残された貴重な史料について関心を持つ広汎な人々の交流の場ともなるような史料調査活動。より科学的で厳密な史料調査や保存のための方法を模索し、同時に、独自に人材を養成しうるような場でもあるような史料調査・研究活動。こうした活動を一つのイメージとして描きながら、ここに「房総史料調査会」を設立したいと思います。趣旨をご理解のうえ、ぜひご参加下さるよう心からお願いいたします。

ここでは、史料をめぐる危機的状況という現状認識に立ち、それらの永久的な保存方法やその前提としての史料調査法の確立や調査に携わる人材の養成が急務であることを訴えている。「公文書館法」が成立した翌一九八七年以降、現在に至るまでの動向は、大筋として、この認識に誤りのないことを示している。

二、会員の構成

――目　次――

「房総史料調査会」の活動について……立野　晃(1)
21世紀の史料保存をになうアーキビストの育成をめざして……研修会委員会(4)
文部省科学研究費補助金による研究成果報告……(6)
信濃国松代八田家文書の整理を担当して……大藤　修(8)
大型絵図の複製について……山田　哲好(9)
歴史学関係諸学会懇談会（歴懇）第五回シンポジウム「学術情報問題を考える」に参加して……大友　一雄(10)
受贈図書……(11)
彙報……(15)

本会の会員は、本年七月現在約八十名である。構成員は様々な層からなっている。まず、会の前身が千葉大学教育学部歴史学研究室および東京大学文学部国史学研究室であるため、この二大学の教官・大学院生・学生・ＯＢが数的には多数を占めている。しかし、それだけにとどまらず、文書館・史料館・博物館といった歴史資料保存機関や自治体史編さん室で日々史料整理を担当している職員、また、会の趣旨に興味・関心を持つ前記二大学以外の院生・学生が広汎に入会しており、まさに、特定の流派にこだわらない史料調査を繰り広げているのである。

三、活動内容

現在の会の主要な活動としては、次のようなものがある。

(1) 史料調査

会の最も主要な活動である。毎年五～六回、土・日曜日をはさんだ二泊三日程度の日程で、史料が伝存する現地の農家等に赴いて実施している。費用は、すべて参加者の自弁である。毎回の参加者は二〇～四〇名程度である。

作業は、まず文書群の現状記録を詳細に行った上で、封筒詰めによる整理・目録作成・筆写等の作業を班単位で分担している。夜間には必ずミーティングを開き、その日の整理成果の発表や調査地域の歴史や史料調査法に関する小報告を行い、よりよい史料調査方法を模索しつつ、研究的活動もあわせて行っている。

現在までのところ、会主催の調査が終了し、目録が完成しているものは次の通りである。

①君津市久留里大谷区有文書
②君津市平山区有文書
③君津市根本伯部良蔵家文書
④君津市人見守八郎家文書
⑤君津市内箕輪区有文書
⑥茂原市弓渡森川薫家文書
⑦茂原市萱場中村久夫家文書
⑧東金市福俵区有文書
⑨東金市福俵浜辺功家文書

なお、現在は、茂原市法目石渡備一家文書および同市小萱場長谷川理成家文書の整理を継続中である。

さて、本会の史料調査において特色をなしているのが、「現状記録」をきわめて精密にとる点である。周知のごとく、史料整理においては、史料群を生んだ機関・団体・家・個人等の活動の体系を反映している「原秩序」にアプローチするため、文書群の発見された「現状」をむやみに崩してはならないという原則がある。また、整理に際しては、「現状」を詳細に記録化しておく必要がある。そこで、当会では、文書のまとまり（その位相によって「単位」・「組織」の仮称を付している。）ごとに写真撮影・スケッチを行い、かつ、整理のため封筒に詰めていく段階では、その様子をマイクロ・カメラに撮影するという方式を採用している。

（なお、詳細は、本年三月に刊行の本会会誌『紙魚之友』第九号に掲載された吉田伸之氏「現状記録の方法について」を参照されたい。）

(2) 研究例会

会員の中では、前掲の史料調査の成果を利用した近世・近代史の研究活動も盛んである。その成果を会員全体で共有するため、一年に三～四回程度の割合で「研究例会」を開催している。前述の史料調査とは、ちょうどフィードバックの関係にあると言ってよい。現在までに合計で七回行われている。そのテーマのみを以下に掲出してみる。

①「•上総国長柄郡粟生野村宮三郎一　件•をめぐって」
②「明治初年の大谷村ー久留里大谷区有文書の基礎的研究ー」
③「下総国千葉郡犢橋村稲千場一件について」
④「一括文書の整理について」
⑤「旗本河野氏知行所•賄金一件•をめぐる諸問題」
⑥「下総国千葉郡平川村の御林の構成と管理・用益形態について」
⑦「地方改良運動の展開と限界ー模範村千葉県山武郡源村の場合ー」

また、例会に準ずるものとして、史料調査時における小報告の中にも、従来の調査・研究蓄積を踏まえたものが見られ、更には、本会の史料調査の成果を利用した研究論文（卒論・修論を含む）や報告等も近年増加しているが、詳細は割愛する。

(3) 会誌『紙魚之友』

会で行った史料調査の報告や会員の研究成果の発表の場、あるいは史料調査に関する情報の窓口として刊行されているのが会誌『紙魚之友』である。近号の場合、体裁はＢ５判で八～十ページ程度である。

一九八六年三月に第一号が発刊さ

れて以来すでに九号（一九九〇年三月現在）を数えている。次に、各号に掲載された調査報告・研究報告のテーマを掲げてみる。

○第1号（一九八六年三月発行）
「調査報告　東金市台方区有文書」
「調査報告　東金市史編さん室所蔵旧伊藤家文書」
○第2号（一九八六年六月発行）
「調査報告　久留里大谷区有文書（上）」
「研究ノート　房総と江戸ー農村に残る「出府」記録等についてー」
○第3号（一九八七年二月発行）
「調査報告　久留里大谷区有文書（下）」
「史料紹介　国立史料館所蔵上総国長柄郡粟生野村秋葉家文書」
○第4号（一九八七年七月発行）
「調査報告　君津市根本伯部良蔵家文書」
「調査報告　茂原市弓渡森川薫家文書」
「調査報告　茂原市粟生野森川育男家文書」
○第5号（一九八八年二月発行）
「調査報告　君津市人見守八郎家文書」
「調査報告　君津市根本伯部良蔵家文書②」
「研究ノート　弓渡村高札場をめぐる一件について」
○第6号（一九八八年八月発行）
「調査報告　君津市内箕輪区有文書」
「調査報告　東金市福俵区有文書(1)」
○第7号（一九八九年三月発行）
「調査報告　茂原市萱場中村久夫家文書」
○第8号（一九八九年八月発行）
「調査報告　上総萱場村聞き書き抄」
「調査報告　東大法学部法制史資料室所蔵　上総国山辺郡山口村書物について」
○第9号（一九九〇年三月発行）
「調査報告　茂原市小萱場長谷川理成家文書」
「研究ノート　現状記録の方法について」

四、課題と今後の展望

以上、房総史料調査会の活動の内容と理念を概括的に紹介してみた。まだ、産声をあげて五年足らずの会であり、業績は量的にはさほど多くはない。しかし、将来的にますますその確立が待望される「史料整理法」の分野において、その実践の積み重ねがある程度のインパクトを与えつつあるものと自負している。今後、会員の中で真摯な議論を重ねながら、この分野において問題提起を出来ればと個人的には考えている。

さて、この後、本会が更に発展的な活動を継続していくための課題を以下にアトランダムではあるが掲げてみたい。

調査のたびごとに感じるのは、対象史料の膨大さである。本会がフィールドとしている千葉県の茂原・東金・君津等の諸市は一部に宅地化が進行しているものの、いまだ農村的な景観を残している地域が広い。したがって、各家や区・講といった単位で大量の文書が伝存している。一部市町村史等によって整理がなされているものもあるが、それらの大半は、未整理であり、所蔵者の方もその重要性がわからずもてあましているという例が少なくない。したがって、それらの文書は、まさに「消失の危機」に立たされているのである。このことは、本会の活動のみではもはや解決する問題ではなく、該当地域の行政にも大いにその保存について再考を願いたいことであるが、会としても、史料保存についての所蔵者との連携を考えていくべきだろう。

史料整理のプロセスで、会員の中でも議論が続けられているのが「現状記録」についてである。この過程の必要性については、もはやここで述べるまでもなく、現在では、不可欠なものとして認識されつつある。しかし、「どのようにして」、「どの程度まで」やればよいのかという点に関しては、会員の中でまだ一致を見ていない。会主催の調査では、前述のごとく現在考えられる最も精密な記録法として、マイクロカメラを利用しているが、撮影された「現状」を後日分析することによって何が把握できるのかは、実はまだ未開拓なのである。また、この方法が小人数での整理の場合は、応用が困難であることは、すでに指摘されていることであり、「現状記録」において何が必要不可欠なのかを今後詰めていかねばならないであろう。

また、このことと関連して、現在やや固定化しつつある会員を更に拡大して、様々な史料調査についての経験を有する人たちを迎え、よりよい史料調査を模索していく必要があることは言うまでもない。

（付記）房総史料調査会への問い合わせは左記にされたい。

○千葉大学教育学部歴史学研究室
○東京大学文学部国史学研究室

◆史料管理学研修会へのおさそい◆

21世紀の史料保存をになう アーキビストの育成をめざして

研修会委員会

史料館は、一九五二（昭和27）年以来「近世史料取扱講習会」を開催し、これまでに二千名をこえる人たちが受講してきた。

しかし近年、全国各地で地方自治体の文書館、公文書館や大学史料館などの新設があいつぎ、近世文書にとどまらず、記録史料全般の保存・整理・管理に関する幅広い専門的知識と技術を求める声が、いちだんと高くなってきた。とくに、コンピュータの利用や史料保存科学など、時代に即応した新しい科目の充実が強く要請されている。

そこで史料館では、これらの声に応えるため、一九八八（昭和63）年から従来の近世史料取扱講習会を改組・拡充し、「史料管理学研修会」を開始したのである。

研修期間は、近世史料取扱講習会の一週間から、現在は、長期研修課程八週間、短期研修課程二週間に延長されている。カリキュラムも大幅に改善され、館外の第一線研究者や文書館員を多数講師に迎えて、実に豊富な内容になっている。

折しも、一九八八（昭和63）年から公文書館法が施行され、わが国でも文書館、公文書館等における専門職員（いわゆるアーキビスト）の養成が急務となってきた。

われわれとしても、大学院レベルの本格的なアーキビスト養成コースがわが国に一日も早く設置されることを望んでいるが、史料管理学研修会がそのための礎石のひとつになれば、と考えている。（安藤）

◆史料管理学研修会の概要

(1)日程と場所

〔長期研修課程〕

七月・九月の計八週間（実質は六週間、残り二週間はレポート作成。なお二年度に分けて受講できる）。於国文学研究資料館。

〔短期研修課程〕

十一月の二週間（実質は一週間、残り一週間はレポート作成）。

平成三年は札幌で行う予定。

(2)募集人数

長期・短期それぞれ35名以内

(3)応募資格

〔長期研修課程〕

①史料保存機関をはじめとして、官公署文書課、自治体史編纂室、大学史編纂室、又は原史料を取り扱う必要のある機関等に勤務し、史料の整理、管理等の業務に従事している者で経験を有する者

②大学卒業以上の学歴を有する者で、史料管理学に強い関心を持つ者

〔短期研修課程〕

史料保存利用機関又は官公署文書課等に勤務している者

(4)研修内容

〔長期研修課程〕（左頁の表参照）

カリキュラムの構成は、

①総論（文書館総論、史料管理学序論、地域社会と文書館など）、

②史料論（史料論総論、古代中世・近世・近現代史料論）、

③史料・記録管理論（史料所在調査法、記録管理論、史料整理と検索手段の作成など）、

④関連講義（情報関連法制、コンピュータの利用など）、

⑤史料管理の実際（施設見学）

となっている。

研修方法は、講義の他に実習、見学、討論の時間を多く設け、楽しく研修できるよう配慮している。

〔短期研修課程〕

カリキュラムの柱は、長期課程とほぼ同じ。実習、見学の時間も組み込まれている。

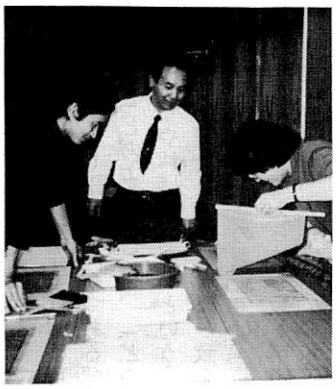
(5)研修レポート

研修生は、研修会終了後、研修レポートの提出を義務づけられている。長期研修課程は四百字詰め原稿用紙二〇枚程度、短期研修課程は一〇枚程度である。

研修レポートの審査に合格した者には、修了証書がおくられる。

(6)申し込みと問い合わせ

平成三年度研修生の募集は、平成三年四月から五月におこなう。お問い合わせは、史料館事務室まで。



（参考）　平成２年度史料管理学研修会長期研修課程日程表

［前期］平成２年７月９日～８月３日

	1 (9:30～11:00)	2 (11:10～12:40)	3 (13:40～15:10)	4 (15:20～16:50)
7／9（月）	開講式・オリエンテーション	文書館総論（史料館・森　安彦）		見学（史料館）
7／10（火）	レポート準備	史料論総論（史料館・大藤　修）		
7／11（水）	史料保存環境論（茨城県立歴史館・高橋　実）		史料所在調査法（史料館・渡邊尚志）	
7／12（木）	地域社会と文書館（藤沢市文書館・高野　修、於同館）		藤沢市文書館における史料管理（同館・高野、石井修、於同館）	
7／13（金）	近世史料論Ⅰ（幕藩史料）（東洋大学・大野瑞男）			レポート準備
7／14（土）	休　日			
7／15（日）	休　日			
7／16（月）	近世史料論Ⅱ（町方史料）（史料館・鶴岡実枝子）			レポート準備
7／17（火）	古代中世史料論（東大史料編纂所・千々和到）		ＮＨＫデータ情報部における資料管理（同部・前田　滋、於同部）	
7／18（水）	レポート準備	近世史料論Ⅲ（村方史料）（史料館・森　安彦）		
7／19（木） 7／20（金）	史料の保存科学（東京国立文化財研究所・増田勝彦、東京芸術大学・稲葉政満、東京修復保存センター・坂本　勇）（於・東京国立文化財研究所）			
7／21（土）	休　日			
7／22（日）	休　日			
7／23（月）	情報関連法制（東大社会科学研究所・井出嘉憲）		レポート中間報告会	
7／24（火）	レポート準備		史料の収集と受入（史料館・浅井潤子）	
7／25（水） 7／26（木）	近世史料の整理と検索手段の作成（史料館・大藤　修、安藤正人、渡邊尚志）			
7／27（金）	史料の装備と配架（前史料館・原島陽一）			レポート準備
7／28（土）	休　日			
7／29（日）	休　日			
7／30（月）～8/3（金）	研修レポートの指導と作成（史料館教官）			

［後期］平成２年９月３日～９月28日

	1 (9:30～11:00)	2 (11:10～12:40)	3 (13:40～15:10)	4 (15:20～16:50)
9／3（月）	オリエンテーション	史料管理学序論（史料館・安藤正人）		レポート準備
9／4（火）	レポート準備	近現代史料論Ⅰ（行政史料）（京都府立総合資料館・中谷　彌）		
9／5（水）	コンピュータの利用（史料館・山田哲好）		国立公文書館における史料管理（同館・小林一夫、於同館）	
9／6（木）	レポート準備	記録管理論（千代田化工建設㈱・作山宗久）		
9／7（金）	情報提供サービス機関としての図書館と文書館（慶応大学・高山正也）			レポート準備
9／8（土）	休　日			
9／9（日）	休　日			
9／10（月）	レポート準備	史料の利用と情報サービス（史料館・山田哲好）		
9／11（火）	組織体と記録（明海大学・安澤秀一）		視聴覚記録の保存と利用（常磐大学・後藤和彦）	
9／12（水）	レポート準備	行政文書の評価と移管（北海道立文書館・鈴江英一）		
9／13（木） 9／14（金）	近世現代史料の整理と検索手段の作成（東京都公文書館・水口政次、水野　保）（於・東京都公文書館）			
9／15（土）	休　日			
9／16（日）	休　日			
9／17（月）	レポート準備	近現代史料論Ⅱ（民間史料）（専修大学・加藤幸三郎）		
9／18（火）	埼玉県立文書館における史料管理（同館・白田勝美、太田富康、於同館）			
9／19（水）	裁判記録の保存と利用（弁護士・竹澤哲夫）		文化財保存施設の防災対策（都市防災研究所・小川雄二郎）	
9／20（水）	史料の修復・補修（宮内庁書陵部・古関　豊、藤村文男）			
9／21（金）	総括討論		レポート準備	
9／22（土）	休　日			
9／23（日）	休　日			
9／24（月）	休　日			
9／25（火）～9/28（金）	研修レポートの指導と作成（史料館教官）			

文部省科学研究費補助金による研究成果報告

本稿は、昭和六三・平成元年度の二カ年継続で、研究課題「史料所在情報の蓄積検索システムに関する研究」について、文部省科学研究費補助金総合(A)の交付を受け、調査・研究を実施した成果について報告するものである。

本研究スタッフは、当館情報閲覧室長安澤秀一を代表に、当館員と大学の歴史、情報科学研究者で組織し、二カ年の補助金交付総額は一、四九〇万円で、各年度別配分額は、昭和六三年度八〇〇万円、平成元年度六九〇万円である。

本研究は、昭和六〇～六二年度科学研究費総合(A)「近世・近代史料所在情報の収集及びその体系化に関する基礎的研究」の成果を引き継いで、史料所在情報に関するデータベースを構築することがその目的である。具体的には史料所在情報の基礎である史（資）料目録の補完的な調査・収集を行い、それら目録類の書誌データベース＝ SACIS(Shiryokan Archival Catalogue Information System) を作成することと、目録類に収録されている史料群一件ごとに作成したデータカード（所在地・所蔵者・職業・旧地名・旧支配・旧階層職業・年代・数量・内容・所蔵関係・保存状況・利用状況・出典・請求記号・調査年月日・調査者住所氏名）を基に、史料所在データベース＝ SINDBAD(Shiryokan National Data Base of Archival and Documentary resources) を作成することである。

なお本研究で作成したデータベースは、全国の史料保存利用機関をはじめ、広く研究者に提供できることを念頭に、またコスト面を考慮して機種の選定をした。その結果できるだけ汎用性を保ち、データの互換性を重視して MS-DOS 環境でのファイルを作成することにし、ハードウェアは NEC PC-98 シリーズのパソコン二台とそれぞれに40ＭＢのハードディスク二台を増設し、全体で160ＭＢの容量を確保し、ソフトウェアは dBASE Ⅲ PLUS を使用した。

まず史料所在情報の基礎となる史（資）料目録類の調査・収集は、前三カ年の成果を踏まえて、それを補完する目的で実施した。その結果、七五機関に及び調査を実施することができた。文末に〔都道府県別調査機関一覧〕を掲げ、ご多忙にもかかわらず調査・収集にご協力いただいたことに記して深甚なる謝意を表す次第である。収集できた目録類は五九九タイトル、六六〇冊に及んだが、これらの中には地方史誌編纂に伴って作成された公刊されていない目録類が大量に含まれており、複写のために貸し出し手続きなど、多大の便宜を図って頂いた。

そこで既収集分の目録類を基礎に SACIS を作成したが、現在二、四五五タイトル、五、〇六二冊分の入力を終えた。SACIS を作成する目的は、様々な項目（フィールド）での検索はもとより、データの並べかえ(SORT や INDEX) を可能とし、それを利用しての高速検索を可能（瞬時）とすることで、これまで図書カードで情報を管理していた現状からすると利便性が格段に向上した。入力の対象とした目録類は、書誌事項の正確を期すため、史料館で収蔵しているものに限定し、本研究を開始した前年（昭六二年）度までに収集・整理を終えたものである。したがって昭和六三年以降収集した分については、整理や製本作業の手順の制約で未入力である。これまでの目録類の整理方法は、NDC（日本十進分類法）に準拠したうえで、発行所（出版地）を基準に各都道府県に分類している。この点で発行所と史料の出所が異なる場合が多く、これをカバーするために史料の関係（出所）地という項目を最大五つ設定した。この入力は、出所の都道府県名を日本十進分類法に準拠した末尾二桁のコードを付与することで、全国を北から順に配列可能にした。　五項目を超える場合は、後述する史料群一件ごとのデータカードを基礎にした SINDBAD で補完することとした。また目録の特徴は、発行形態が多様である。シリーズのなかの一冊、あるいは部分でもそのデータを副書名として二項目設けて検索可能にした。さらに史料群の属性として現収蔵者（機関）のデータが不可欠なため、二項目設定した。入力に際して、機関の組織替えに伴う名称変更がある場合は、最新の機関名に統一して処理した。入力で労力を要したのは、書名や副書名のヨミで、特に地名や個人名である。地名については種々の地名辞典類を確認したが、個人名

はそれぞれの目録の発行機関に問い合わせをしたが、完璧を期すことができなかった。特殊文庫の場合、その内容についてできるだけ内容注記の項目に入力した。

次にSINDBADの作成について留意したのは、①史料所在情報に固有のデータ構造の分析、②大量の史料所在情報をデータベース化するにあたって生じる問題点の解明、③史料の利用者としての立場からみたデータベースに対する需要動向の検討である。結果、これまで作成済みのデータカードを基礎に、新たに史料群そのものの固体識別子として「出所」の項目と、史料が移動した場合の検索に応じられるよう「出所」に対応する「現地名」、あるいは史料群の一部が他地域に関係する場合の「関係地」などの項目を追記した。入力件数は北海道と沖縄を除く都府県で、二八、〇五二件である。ファイルの作成手順については紙数の関係で省略するが、最終的にMS－DOSのテキストファイルとそれを基にdBASE Ⅲ PLUSでのデータベースを構築した。この検索システムは、一般利用者の検索作業を支援することに重点を置き、メニュー形式で利用者を誘導しながら、検索の実行、検索結果の表示などができる。

記録史料は、歴史学をはじめとする人文・社会科学系研究諸領域の基本的学術資料としてきわめて重要であるにも関わらず、わが国においてはその保存体制さえ十分に整っていないため、コンピュータを利用した全国的な史料所在情報の蓄積・検索システムの開発は、これまで全く試みられていなかった。その意味で本研究が新しい試みであっただけに、問題点も数多く発見された。特に、各史料群のデータ記述の情報源である史料目録類の記述方式や記述の精粗がまちまちであるため、データ記述の標準化が極めて困難な点は大きな問題である。史料所在情報をより有効なものにしていくためには、史料管理学や史料学の観点から情報（特に史料群の構造と性格に関する情報）のデータ記述の標準化について、さらに理論的・実験的研究を進めていく必要があろう。

終わりに、研究分担者としてご快諾いただいた各位及び庶務・会計上の運営についてご尽力いただいた当館管理部諸氏に対し、記して深甚なる謝意を表したい。

〔文責・山田哲好〕

〈都道府県別調査機関一覧〉

〔北海道〕　北海道立文書館　北海道立図書館　北海道開拓記念館
〔岩手県〕　一関市立図書館
〔宮城県〕　古川市図書館　田尻町役場　宮城県立図書館　仙台市民図書館　東和町教育委員会　柴田町役場
〔秋田県〕　秋田市立中央図書館
〔山形県〕　山形県立図書館　米沢図書館　鶴岡市立図書館　鶴岡市立郷土資料館　致道博物館　酒田市立中央図書館　酒田市立光丘文庫　余目町立図書館　松山町資料館　鮭川村公民館
〔新潟県〕　新潟県立新潟図書館　新発田市立図書館
〔石川県〕　石川県立図書館　石川県立郷土資料館　金沢市立図書館
〔和歌山県〕　和歌山大学紀州経済史文化研究所　和歌山市史編纂室　かつらぎ町史編集委員会　新宮市立図書館
〔三重県〕　三重県総務部学事文書課　三重県立図書館　三重県議会図書館
〔大阪府〕　大阪府公文書館　大阪大学附属図書館
〔兵庫県〕　兵庫県立図書館　兵庫県立歴史博物館
〔奈良県〕　柳沢文庫（大和郡山市）　奈良市史編集室、大和郡山市立中央図書館　大和高田市立図書館　五條市立図書館　五條市立民俗資料館　十津川村歴史民俗資料館
〔岡山県〕　岡山県史編纂室、岡山県総合文化センター、岡山大学図書館、総社市史編纂室、金光教学研究所
〔広島県〕　宮島町立宮島歴史民俗資料館
〔山口県〕　光市立図書館　防府天満宮歴史館　長門市立図書館
〔佐賀県〕　唐津市立図書館　佐賀県立図書館　佐賀県立博物館　佐賀大学附属図書館
〔長崎県〕　長崎県立長崎図書館　長崎市立博物館
〔熊本県〕　熊本県立図書館　熊本大学附属図書館　熊本女子大学附属図書館
〔大分県〕　大分県立大分図書館　大分県史編纂室
〔鹿児島県〕　鹿児島県教育委員会　鹿児島県立図書館　鹿児島大学附属図書館　鹿児島県維新史料編纂所　尚古集成館　屋久町史編纂室　上屋久町教育委員会

信濃国松代八田家文書の整理を担当して

大藤　修

信州松代藩の御用達商人であった八田家に伝来した文書群は、昭和二八年に九代目御当主恭平氏より当館に譲渡された。総点数は数万点にのぼる。年代的には近世および明治初年のものである。それ以降、昭和期に至る文書は、長野市立博物館に所蔵されている。当館が受け入れた八田家文書は、当時史料館に勤務されていた吉永　昭氏によってその一部がカード目録化され、研究論文もいくつか発表されている。吉永氏の優れた研究により八田家文書は学界の注目を浴びるところとなったが、氏が大学に移られたあと、あまりに数量が厖大なためか整理の引き受け手がないまま年月を重ねてしまった。いつまでも放置しておくことはできないということで、私に整理の天命が下ったのは数年前である。まだ史料館に入って五、六年しか経っておらず、アーキビストとしてはヒョッコ同然の頃であった（今もって館内では〝ヒョッコ〟という愛称で呼ばれているが）。私に白羽の矢が立ったのはもちろん能力の故ではない。これひとえに子供を三人つくった体力を見込まれてのことである。しかし、文書の整理は、ただ体力さえあればできるというものではない。そこで、私の能力不足を補ってもらうため、ミスター・アーキビストを自任されるシューイチ・ヤスザワ（日本名「安澤秀一」）氏にサポートを仰ぐことにした。

八田家文書はなにぶん大量のため、一度に目録化するのは不可能である。そのため、整理の済み次第、逐次目録を刊行していく方針を立てた。今日までに三冊の目録を刊行しており、「八田家書目録」（その一）と同（その三）は私が、同（その二）は安澤氏が作成したものである。私はそれまで、漁村文書と農村文書を整理した経験はあったものの、商家文書を整理するのは初めてであった。そのためまったくの暗中模索の状態で大量の文書と格闘しなければならなかったのであるが、その過程で、文書整理、目録作成についての方法論を私なりにつかむことができたことは、大きな財産となった。

私も以前は伝統的な主題分類法に従って文書目録を作成していたのであるが、八田家文書の整理を進めていくうち、文書群がどのような組織体の活動の産物として形成されたのかを踏まえて、文書群固有の内的構造＝体系的秩序を表示した目録を作らなくてはならないのではないか、と考えるようになった。八田家に伝来した文書は八田家の家政・家業経営にかかわる文書だけではない。八家の当主およびその子弟は町年寄、糸会所・産物会所・松代商法社の役人、松代藩の御勝手御用役、産物御用掛等々の公用を勤めていたため、その職務遂行の過程で作成あるいは他から受理した文書も大量に伝来している。また八田家の組織自体も、家政機関および各店の統轄機関である「内方」と営業機関の「店方」とに分化して、後者はさらに営業の種類に応じていくつかの専門の店に分かれていっている。つまり、八田家に伝来した文書群は、種々の組織体の活動にかかわる文書、いいかえれば複数の出所（文書の作成・受理母体）をもつ文書の複合体なのである。したがって、八田家文書目録の作成にあたっては、まず同一組織体の活動にかかわる文書をまとめたうえで、その内部においては同一の用件ないし事項ごとの小文書群に区分して配列する方針をとった。そうすることによって、利用者は、八田家伝来文書群の内的構造、およびそれぞれの文書がどの組織体のいかなる地位・役職にあった人物によってどのような目的で作成ないし受理されたものであるかを、即自的に把握、確認できると考えたからである。

文書群が階層的な固有の内的構造を有するならば、解題も階層構造に対応させる必要があるのではなかろうか。そう考えて、八田家文書目録（その三）では、まず冒頭で八田家に伝来した文書群の構造について総体的に解説したあと、目録本文において各レベルの文書群ごとに解題を付してみた。また、帳簿の形態表記用語についても、料紙の使用法を勘案して類型化を試み、これまで当館の目録で表記を省略していた書付型文書の形態も（その三）では表記してみた。文書の形態も史料的価値をもっているのであるから、それについての情報も目録に細密に記す要があるのではないかと考えたからである。

大型絵図の複製について

山田哲好

史料館で収蔵している史料には、国絵図・城絵図・裁許絵図・地引絵図などの絵図類が多数あり、一辺が二メートル以上の大型絵図は約五〇〇点（点検途中）になると予想される。この内、最大は伊勢国絵図（元禄）で六×三・六メートルである。これら大型絵図には、出版物への掲載を含めて利用頻度の高いものがある。その間に、開閉や撮影時の人工光の照射を原因とする損耗、汚損、変褪色が目立ってきたことと、史料を広げる物理的スペースの問題もあり、早期に原本保護の利用体制の確立が迫られていた。既に利用頻度の高い絵巻物や錦絵などについてカラー撮影による複製化によって保存措置を講じてきた（本誌第四八号参照）。今回の大型絵図の複製化に伴う経費についても、数年前から概算要求に掲げてきたが、平成元年度途中における追加配分として支給を受けた。実現にあたっては当館管理部はもとより文部省関係者の理解と尽力を得ている。

複製化についての当初計画は、従前のカラーフィルムによる撮影・紙焼を予定していたが、検討する過程でチバクロームによるダイレクトプリント方式を採用することにした。これはレンズを通して直接感光材に写し出す方法で（当然ネガフィルムは残らない）、被写体→レンズ→感光材が一つの光軸上にあって固定されていることが特徴である。この方式を採用した理由は、①保存年限、②解像力、③分割枚数、④利便性の諸点で通常のカラーフィルム方式と比較して利点が認められたからである。すなわち、①通常の五～六年に比して五十年以上の保存が保証されており、表面をラミネート加工することによりさらに倍加する、②解像力が優れており、周辺部でもゆがみがない（原本九ポイント相当の文字を五〇％縮小でも肉眼で判読可能）、③最大B0判までプリントが可能なので、分割枚数が大幅に減少、④分割が少ない分だけ合成が容易となる、などである。反面、経費はかなり高くなるが、前記諸条件の優劣から新方式の導入に踏み切った。

実際の撮影に当たっては、カメラが設置してある専用スタジオへ史料を搬出し、バキュウムボードとマグネットを併用して固定した。カメラは BOUZARD BCC-E（仏製）で大型の製版カメラに酷似しており、レンズは三色の色収差（波長の違いによる屈折率のばらつき）を補正してあるアポクロマートレンズである。ライティングは大きい被写体に対して均一に光を分布させるため、左右に六灯づつ十二灯のハロゲンランプを使用したが、被写体から約二メートル離し、ランプの前面に色調整用のほか防熱用、紫外線カット用のフィルターを使用して照射被害の軽減に留意した。原本の色調を正確に復原するためレンズの前にゼラチンフィルターかけて微調整しながら、多いときは六回もテストして慎重に撮影を行った。今回の撮影は原本の最小文字を確認し、それが五〇％の縮率で判読可能だったのですべて同縮率に統一した。従ってプリントは原本に比して一辺の長さが半分で、面積は四分の一に縮小できた。最後に合成したプリントに五〇ミクロン厚のポリエステルフィルムを両面にラミネート加工（コールドタイプ）を施した。前述したように、フィルムを使用しないため再複製に難点があることを補うためでもある。なお利用者が撮影することを考慮して、ラミネート素材は表面を梨地（無反射）処理したものを採用した。

ところで、絵図複製の最難関は分割撮影したものを合成する際に生じるズレである。繋ぎ加工は文字部分をできるだけ避けたり、折り目に添って合成するように工夫したが、最大で九分割した絵図などでは数ミリのズレが生じた。それでも通常の方式よりは全体の誤差は小さいと思う。今回の経験をもとに、事前に修復補修を施したり、原本の紙質が薄く皺が多いものに適切な補強をして、よりよい複製物の作成に努力したい。多様な利用ニーズに対応しながら史料原本の永久保存措置としての複製化を進めるのが史料保存利用機関の責務であろう。

今回は総点数八四点について複製化を実施することができたが、予想点数全体の約五分一に過ぎないので、残り分についてもできるだけ早期実現を図りたい。

終わりに、手の掛かる困難な撮影に技術的・専門的な点でご協力いただいた関係諸氏にお礼申し上げる次第である。

一九九〇年六月三〇日
歴史学関係諸学会懇談会（歴懇）第五回シンポジウム

「学術情報問題を考える」に参加して

大友一雄

明治大学を会場に開催された本シンポジウムは、個人の力では、把握し兼ねる程大量のものとなり、しかも様々な形で提供される歴史学に関する情報を、いかに収集し、より開かれた利用環境を今後どのように作って行くのか、この点について話し合うものであり、所　理喜夫氏「日本歴史学協会の提言をめぐって」、佐々木潤之介氏「歴史学研究と情報問題」、安藤正人・山田哲好氏「記録史料情報システムの構想と課題」の三報告が用意されていた。

ただし、当日の報告内容は、事前に案内などによって伝えられた以上に、科学運動としての性格を強く持つものであった。ことに、所・佐々木両氏の報告は、歴史学情報を取り扱う研究機関設置に向けての手続き、設置機関の性格、さらには今後の具体的な日程・段取りについても考えを示すものであった。

重要な内容であり、詳細な紹介も必要だが、紙幅の関係もあり、ここでは所・佐々木両氏が示された、これまでの運動の経過などに重点を置き記すことにする。

まず、所報告であるが、同報告は今年三月二七日、日本歴史学協会が日本学術会議歴史学研究連絡委員会委員長弓削達宛に提出した「国立の歴史記録史料情報研究センター（仮称）」設立の要望書にかかわって、同書提出にいたるまでの経過とその趣旨、今後の課題について確認したものである。そこで示された経過を略述すると次のようである。

要望書提出の背景には、いわゆる史料館問題（国立歴史民俗博物館との統合問題、地方移転問題）があった。移転問題にかかわって日歴協では、国立史料館・国立公文書館・史料保存利用の三つの特別委員会が中心となって協議を行ない、運動のために次のような合意に達した。①国文学研究資料館が移転を決定した場合、史料館が付属機関として移転することに反対、あるいは独立を要求することは極めて困難。②国文学研究資料館と共に移転することが決定した折には施設・機能の拡充を要求する。③学術情報のセンターとしての機能、アーキビストの養成に関する機能を持たせる。日歴協はこうした合意の上で、日本学術会議歴史学研究連絡委員会の史料部小委員会（委員長中田易直氏）と話し合いを持ち、日本学術会議から国へ歴史情報を取り扱う研究機関設置の勧告を出す方向で進めることを合意し、それを受けて三月二七日、日歴協から先の要望書を提出した。史料館問題を討議する中で、今日の学術環境とも関連して情報機関の設置問題が、ここで出てきたわけである。

一方の佐々木報告は、所報告をうけて、要望書提出後の具体的な経過、勧告の内容、運動のための基本理念について述べるものであった。

経過に注目すると、要望書提出後、学術会議の歴研連小委員会と日歴協は、度々討議を行ない、勧告の内容を詰めてきた。

また、当日配布の検討資料1と題するレジュメは、歴研連小委員会との検討によって作成されたものであり、勧告文に、そのままなる可能性があることも示された。

したがって、佐々木氏の報告は、日本学術会議から政府への提出を目的とした勧告の作成過程と、その内容の説明を行ない、意見を広く求めようとするものであったともいえる。したがって、検討資料1の紹介も必要なのであるが、それは六〇〇〇文字にも及ぶものであり、各学会へも示されるとのことなので、ここでは省略する。

さて、このシンポジウムは、史料館問題以降の運動を、どのように取りまとめ、実りあるものにして行くのか、その方法が具体的に示され、討議される機会となったことで、まず注目される。開かれた歴史学に関する情報研究機関の設立は、今日の社会状況、情報の膨大化に鑑みれば当然の要求と思う。ただし、注意されるのは、よりよい情報が利用者に提供されるためには、資源たり得る情報の取り扱いを学問的体系にまで高める必要性があると言うことであろう。コンピュータに通じた技師がいればよいというものではない。佐々木氏も「情報資源学」構築の必要性を主張されるが、技術優先の時代に突入しつつある現在であるだけに、勧告文においては、利用者の立場に一層留意し、然るべき人材の養成・確保についても提言させることを望みたい。

受贈図書　平成元年度（二）

日本史写真集〔山川出版社〕
内閣文庫所蔵　正保城絵図　Ⅱ－11〔国立公文書館〕
公文類聚目録　5〔同右〕
（北海道）椴法華村史
岩手の古文書〔岩手県文化振興事業団〕
（岩手県）北上市文化財調査報告書　第47～56集〔北上市教育委員会〕
東北歴史資料館資料集　23～25
史跡陸奥国分寺跡・陸奥国分尼寺跡保存管理計画書〔仙台市教育委員会〕
仙台市文化財調査報告書　第100・114・123～125・127・131集〔同右〕
（山形県）天童市史編集資料　第46・47号
（福島県）山都町史　第1巻
（福島県）滝根町史資料集　第16・第17集〔滝根町教育委員会〕
（茨城県）龍ヶ崎市史民俗調査報告書　Ⅳ〔龍ヶ崎市教育委員会〕
（群馬県）太田市議会史　資料編Ⅰ
船橋市史　史料編六
（東京都）武蔵野市史　続資料編二～五・別編
文化財の保護　第21号〔東京都教育庁社会教育部文化課〕
大田区遺跡地図〔大田区教育委員会〕
墨田区古文書集成　Ⅲ〔墨田区教育委員会社会教育課〕
墨田区文化財調査報告書　Ⅸ〔同右〕
墨田の錦絵〔墨田区立緑図書館〕
葛飾区古文書史料集　三〔葛飾区教育委員会〕
かつしかの橋　葛飾区橋梁調査報告書〔同右〕
水元・奥戸の民俗〔同右〕
白金館址遺跡　Ⅰ～Ⅲ〔白金館址遺跡調査会〕
西新橋二丁目港区No.19遺跡〔港区西新橋二丁目遺跡調査会〕
青梅ゆかりの文化財〔青梅市郷土博物館〕
東京大学遺跡調査室発掘調査報告書　1〔東京大学理学部遺跡調査室〕
横浜市史　Ⅱ
吉村屋幸兵衛関係書簡　復刻版〔横浜開港資料館〕
秦野市史近世史料　統計編1・2
横浜市文化財調査報告書　第18輯・第14輯の3〔横浜市教育委員会〕
称名寺塔頭光明院表門修理工事報告書〔同右〕
唯念行者と唯念寺〔静岡県小山町教育委員会〕
福井県史　資料編14
新修稲沢市史　資料編十七
青覧記〔立松典子〕
半原藩〔本多美佐夫〕
（愛知県新城市）富岡地区における山論考〔新城市郷土研究会〕
四日市市史　第四巻
京畿内荘園の史料データベース作成と歴史地理学的研究〔東京大学史料編纂所〕
史跡隼上り瓦窯跡〔宇治市教育委員会〕
新修大阪市史　第3巻
大阪市史史料　第二十六・二十七輯
和歌山県史　人物
岡山県史　第九・二十三巻
古文書調査記録　第15集〔福山城博物館〕
阿波国撫養をめぐる商品流通と廻船〔上村雅洋〕
愛媛県史　索引・年表・県政・人物・資料編　現代
福岡県史　近世研究編　福岡藩四・近代史料編　筑豊石炭鉱業組合二・近代史料編　福岡県地理全誌三・近代研究編　各論一
福岡大学総合研究所資料叢書　第6冊
佐賀県文化財調査報告書　第95集〔佐賀県教育委員会〕
特別史跡名護屋城跡並びに陣跡〔同右〕
南日本文化研究所叢書　14〔鹿児島短期大学付属南日本文化研究所〕
諸国叢書　第六輯〔成城大学民俗研究所〕
大日本史料　第二編之二十三・第八編之三十四〔東京大学史料編纂所〕
大日本古文書　家わけ　第十七　大徳寺文書　真珠庵文書之一・第十八　東大寺文書之十四・幕末外国関係文書　四十二〔同右〕
大日本古記録　民経記五・二水記〔同右〕
大日本近世史料　近藤重蔵蝦夷地関係史料三〔同右〕
大日本維新史料　類纂之部　井伊家史料十六〔同右〕
日本関係海外史料　オランダ商館長日記　原文編七〔同右〕
木と土と石の文化〔中央公論社〕
吾が家に残る南朝落日の影〔平塚久雄〕
徳川将軍権力の生成と展開の研究〔所理喜夫〕
近世国家と明治維新〔三省堂〕
週刊朝日百科日本の歴史　別冊　文献史料を読む・近世〔朝日新聞社〕
カメ太郎とまあちゃんの探検〔横浜市神奈川区役所〕

玉だれ新聞　第32号〔天成園企画室〕
人物まんが　日本の歴史　下〔学習研究社〕
勇魚　壱〔小学館〕
宝を天に積む　森本慶三追憶文集〔津山キリスト教学園〕
発禁書と言論・出版の自由〔大阪人権歴史資料館〕
満州移民と被差別部落〔同右〕
サハリン残留韓国・朝鮮人問題〔同右〕
東洋大学百年史　資料編Ⅰ　下〔東洋大学史編纂室〕
魚の日本史〔新人物往来社〕
眼の神殿「美術」受容史ノート〔美術出版社〕
三井文庫蔵品図録　能面〔三井文庫〕
集治監ー開拓と囚人労働ー〔北海道開拓記念館〕
岩手の明治維新〔岩手県立博物館〕
明治時代の錦絵〔大船渡市立博物館〕
まちの成立とにぎわい〔福島県立博物館〕
「きんからかわの世界」展示案内〔たばこと塩の博物館〕
ザ・ホワイト・コレクション〔サントリー美術館〕
横浜の歴史と文化財展〔横浜市教育委員会〕
沼津藩の人材〔沼津市明治史料館〕
修験僧智海とその時代〔京都府立丹後郷土資料館〕
特別テーマ展　大和のはたおり用具〔奈良県立民俗博物館〕
特別展　発掘された古代の在銘遺宝〔奈良県立民俗博物館〕
古文書に見る瀬戸内の海上交易と水軍〔広島県立文書館〕
さつまの和歌図録〔鹿児島県歴史資料センターー黎明館〕
東京ブックマップ89ー90〔書籍情報社〕
行政文書の収集と整理〔埼玉県市町村史編さん連絡協議会〕
著作権講習会テキスト〔文化庁文化部著作権課〕
経済史文献課題1988〔日本経済史研究所経済史文献編集委員会〕
仏教文化事典〔佼成出版〕
文書による郷土的なレファレンス質問に対する回答事例　選集版〔仙台市民図書館〕
（山形県）荘内史料集　16ー1〔鶴岡市史編纂会〕
（茨城県）筑波町史　上巻〔つくば市〕
（東京都）日の出町史　文化財編
小平市郷土資料索引　第1集〔小平市教育委員会〕
豊島区立郷土資料館調査報告書　第四集
馬込文士村ガイドブック〔大田区立郷土博物館〕
豊島区地域地図　第1集〔豊島区立郷土資料館〕
江戸復原図〔東京都教育庁社会教育部文化課〕
横浜港史　総論編・各論編・資料編〔横浜市港湾局企画課〕
（富山県）細入村史　史料編
（兵庫県）相生市史　第五巻
（愛知県）刈谷市史　第一・五巻
贈従一位　池田慶徳公御伝記　四〔鳥取県立博物館〕
津山の町並〔津山市教育委員会〕
津山の社寺建築〔同右〕
日本大学学祖、山田顕義伯爵の墓所整備に伴う学術調査報告書1988〔日本大学〕
資料集　竹内栖鳳のすべてVo 1～3〔王舎城美術宝物館〕
五稜郭からのメッセージ〔市立函館博物館〕
山村才助と蘭学の時代〔土浦市立博物館〕
北武蔵の戦国武将文書展〔埼玉県立文書館〕
豊島の板碑〔豊島区教育委員会〕
失われた耕地〔同右〕
子供たちの出征〔同右〕
写真機の歴史と世田谷の風景〔世田谷区立郷土資料館〕
根付展〔大田区立博物館〕
吉田城と歴代城主〔豊橋市美術博物館〕
まんが　日本史年表4〔学習研究社〕
Roads to Xandu〔A Kevin Weldon〕
北海道立文書館史料集　第五〔北海道立文書館〕
蝦夷地図抄〔沙羅書房〕
（宮城県）柴田町史資料　第七集
（秋田県）鹿角市史資料編　第二十一集
（福島県）新庄市史　第一巻
（福島県）梁川町史　9
（福島県）山都町史資料集　第一・三・六集〔山都町教育委員会〕
山都町の文化財　第一集〔同右〕
高崎史料集　藩記録（大河内）　2〔高崎市教育委員会〕
（埼玉県）大井町史　資料編　Ⅰ・Ⅲー1・2
（埼玉県）大井町史料　第38集〔大井町教育委員会〕
鳩ヶ谷市の古文書　第十三集〔鳩ヶ谷市育委員会〕
鳩ヶ谷市の文化財　第十三集〔同右〕
みよしほたる文庫　1〔埼玉県三芳町教育委員会〕
船橋の民家　12〔船橋市教育委員会〕
ふなばしの歴史と文化財〔同右〕
夏見大塚ー第6次調査報告ー〔船橋市遺跡調査会〕
牛五郎日記　第八冊〔牛五郎日記研

究会〕
世田谷の地名（下）〔世田谷区教育委員会〕
高尾山薬王院文書　第一巻〔法政大学多摩図書館地方資料室委員会〕
偕生園北遺跡〔昭島市教育委員会〕
多摩川台古墳群発掘調査報告書　I〔大田区教育委員会〕
敦賀の歴史
福井市郷土歴史博物館史料叢書　六
（静岡県）舞阪町史　上巻
（静岡県）磐田市誌シリーズ　第十冊　上・下
新編岡崎市史　第二・十六巻
海風想　大宝新田開拓三百年を偲ぶ〔立松典子〕
三重県史　別編　統計
斎宮跡発掘資料選〔斎宮歴史博物館〕
愛知県教育史　資料編　近代一・二〔愛知県教育委員会〕
（京都府）向日市埋蔵文化財調査報告書　第26・27集〔向日市教育委員会〕
（大阪府）高石市史　第一巻　本文編
和歌山県史　近現代一
（大阪府）阪南町埋蔵文化財報告Ⅶ～Ⅸ〔阪南町教育委員会〕
兵庫県史　史料編　近世1・中世4
（山口県）下松市史　通史編
団兵御仕成記　（三）〔岩国徴古館〕
絵図でみる防長の町と村〔山口県文書館〕
徳島藩士譜　上巻〔徳島藩士譜刊行会〕
阿淡年表秘録・続編〔鳴門古文書研究会〕
松山の歴史〔松山市〕
（高知県）本川村史　第二巻
（佐賀県）三日月町史　下巻
百町原地区遺跡〔日向市教育委員会〕
鹿児島県史料　鎌田正純日記二・旧記雑録拾遺諸氏系譜2〔鹿児島県歴史資料センター黎明館〕
新・現実主義を生きる（上）〔之郷利昭〕
私の履歴書（畑和）〔同右〕
神奈川大学日本常民文化研究所調査報告　第14集
竹井美術館図録〔藤田裕彦〕
可睡斎史料集　第一巻〔思文閣〕
甦った珍木・楓樹〔日光東照宮〕
寛永諸家系図傳　一・二〔同右〕
リバティーブックレット　3〔大阪人権歴史資料館〕
考古学が語る戦争と差別〔同右〕
日本家族史〔大藤修〕
郵政省郵政研究所附属資料館研究調査報告1
住友史料叢書　銅異国売覚帳（抄）
鉱業諸用留　上・中・銅帳〔住友史料館〕
輝ける世紀へ　―三ッ星ベルト70年史〔三ッ星ベルト株式会社〕
有田窯業の流れとその足おと〔香蘭社社史編纂委員会〕
安田保善社とその関係事業史　人名索引　企業団体名索引〔安田不動産株式会社〕
SAPIO　第15号〔小学館〕
Housing & Plannig〔IFHP 千葉国際会議組織委員会事務局〕
千葉県立大利根博物館　常設展示案内
小中学校における千葉県立大利根博物館利用の手引き
10年の歩み〔千葉県立大利根博物館〕
第四十一回　正倉院展〔奈良国立博物館〕
一宮の名宝（Ⅲ）〔一宮市博物館〕
鷹狩り　その技とこころ〔足立区立郷土博物館〕
揖保川流域の古代首長たち〔龍野市立歴史文化資料館〕
龍野市立歴史文化資料館常設展示図録〔龍野市教育委員会〕
「太宰管内志」の世界〔北九州市立歴史博物館〕
襤褸―古布にみる人々のくらしとその心〔同右〕
くし・かんざし・化粧具　江戸の巧
芸〔サントリー美術館〕
挑むかたち―サントリー美術館大賞展'89〔同右〕
幕末直参旗本の軌跡〔霞会館資料展示委員会〕
近代日本のあけぼの　開港から攘夷の海〔同右〕
堺衆―茶の湯を創った人びと―〔堺市博物館〕
「玉電」―玉川伝記鉄道と世田谷のあゆみ―〔世田谷区立郷土博物館〕

平成二年度（一）

青森県立郷土館調査報告　第27集〔青森県立郷土館〕
岩手古文書館㈢　関藩検断役手控書〔岩手古文書研究会〕
大船渡市立博物館研究報告　三陸沿岸地震津波年表
気仙沼市史　Ⅲ　近世編
（宮城県）秋保町史　本編・資料編
東北歴史資料館資料集　22・26・27
仙台市文化財調査報告書　第118・128集〔仙台市教育委員会〕
大館市史　第5巻
鹿角市史　資料編　第22集
（秋田県）比内町史　資料編　第4集
御亀鑑　第2巻　江府(2)〔秋田県教育委員会〕
秋田城跡　平成元年度秋田城跡発掘調査概報〔秋田市教育委員会〕
久保田城跡～本丸御隅櫓跡発掘調査

報告書〔同右〕
米沢市史　民俗編
山形市史資料　第76・77号
（山形県）村山市史編集資料　第18号
（山形県）東根市史編集資料　第22・23号
新庄市史編集資料集　第10号〔新庄市教育委員会〕
白河市史　9　各論編1
福島市史資料叢書　第55・56輯
福島県山都町史資料集　第2・9集〔山都町教育委員会〕
時（とき）の響き～塙町の文化財〔塙町教育委員会〕
茨城県史料　中世編Ⅲ・近代政治社会編Ⅳ〔茨城県立歴史館〕
水戸市史　中巻（五）
（茨城県）藤代町史　通史編・近世史料集(1)
北茨城市文化財調査報告Ⅳ〔北茨城市教育委員会〕
（栃木県）南河内町史資料集　1・2
群馬県史　通史編3　中世・通史編9　近代現代3
（群馬県）黒保根村誌　別巻Ⅰ～Ⅲ
（群馬県）尾島町誌　資料集　第二・三篇
（群馬県）境町史　資料集　第1～6集
新編埼玉県史　資料編16・26
春日部市史　第三巻　近世史料編Ⅴ
所沢市史　現代史料
所沢市史調査資料　別集12・13・31
草加市史　資料編　地誌
（埼玉県）騎西町史　中世資料編
鳩ヶ谷市の古文書　第十四集〔鳩ヶ谷市教育委員会〕
鳩ヶ谷市の文化財　第十四集〔同右〕
飯能市史　通史編・年表・資料編Ⅳ～Ⅻ
埼玉軍政部資料調査報告書〔埼玉県県民部県史編さん室〕
さいたま　21　PRESS　埼玉県県勢概要〔埼玉県広報広聴課〕
千葉県史料　近世編〔千葉県企画部〕
松戸市史　史料編(五)秋谷家文書（上）〔松戸市立図書館〕
（千葉県）印旛村史　通史Ⅱ
千葉いまむかし　第三号〔千葉市教育委員会〕
明治維新期直轄県の成立と展開〔飯島章〕
あびこ版　新編利根川図志〔我孫子市教育委員会〕
房総半島の漁撈用具　第3集〔千葉県立安房博物館〕
中央区年表　昭和時代Ⅸ〔中央区立京橋図書館〕
大田区史　（資料編）　諸家文書3・横溝家文書
大田区の埋蔵文化財　第10集〔大田区教育委員会〕
五十子敬斎日記　大正7～9年〔日野市企画課〕
日野市史　別巻　市史余話
東京市史稿　市街篇　第81・産業篇第34〔東京都〕
東京都古文書集　第8巻〔東京都教育庁文化課〕
都史紀要　34　江戸住宅事情〔東京都〕
安永三年小間附　北方南方町鑑　上〔同右〕
東京の民俗　6〔東京都教育庁文化課〕
浅草寺絵馬扁額調査報告〔同右〕
東京都双盤念仏調査報告〔同右〕
はむらの歴史〔東京都羽村町教育委員会〕
府中市郷土資料集　12〔東京都府中市教育委員会〕
寺沢茂世家文書　第1～3巻〔多摩市教育委員会〕
民権ブックス3　草の根の民衆憲法〔町田市教育委員会〕
平成元年度指定港区指定文化財〔港区教育委員会〕
あらかわの庚申塔　付日待塔〔荒川区教育委員会〕
世田谷区埋蔵文化財調査年報1988〔世田谷区教育委員会〕
稲荷丸北遺跡　Ⅱ〔同右〕
東山野遺跡〔同右〕
奥沢台遺跡　Ⅰ〔同右〕
世田谷の古民家写真集〔同右〕
世田谷区教育史　資料編3〔同右〕
稲城市郷土資料　5〔稲城市教育委員会〕
江戸川ブックレットNo.7　江戸川区の自然③　樹のはなし〔江戸川区教育委員会〕
江戸川区の文化財　第7集〔同右〕
江戸川区文化財調査報告書　第4・5集〔同右〕
須原家文書　8〔同右〕
多摩川水系近世漁業関係史料の収集と考察〔宮田満〕
江戸における町屋敷の経営〔小沢詠美子〕
鎌倉市史　近代史料編　第2・近世通史編
藤沢山日鑑　第8巻〔藤沢市文書館〕
（神奈川県）大和市資料叢書2　わたしが知っている郷土〔大和市役所管理部庶務課〕
小田原市立図書館郷土資料集成　4〔小田原市立図書館〕
座間市史資料叢書　4　日露戦争従軍記〔座間市立図書館〕
入会林野と財産区〔秦野市〕
横浜市文化財総合調査概報（ハ）〔横浜市教育委員会〕

伊勢原市民俗調査報告書　1～3〔伊勢原市史編集委員会〕
柏崎市史　上・中・下巻
加能史料　奈良平安　I～IV〔石川県〕
石川県史資料　近代篇(16)〔同右〕
加賀市史料　10〔加賀市立図書館〕
(福井県)鯖江市史　第7巻　近現代編I
(福井県)三方町史
史料が語る先人のあゆみ〔福井市立郷土歴史博物館〕
(山梨県)都留市史　資料編　民家民俗〔都留市史編纂委員会〕
(長野県)北相木村の石造文化財〔北相木村教育委員会〕
静岡県史　資料編1　考古一・2
考古二・13　近世五・17　近現代
(静岡県)新居町史　第1・2巻
(静岡県)韮山町史　第5巻　上
(静岡県)小山町史　第1巻　原始古代中世資料編
新修稲沢市史　資料編十六
新修半田市誌　本文編　上・中・下巻
(愛知県)佐織町史　通史編
碧海郡野田村の日露戦争　第四集〔加藤修治〕
かりやの民具〔刈谷市教育委員会〕
尾張国町村絵図(名古屋市城編)解説〔佐久間悟郎〕
四日市市史　第一巻　史料編　自然
四日市市史編さん調査報告　第一集　あらためて関西を考える〔大阪経大学会〕
滋賀大学経済学部付属史料館研究彙報　30～38〔滋賀大学経済学部付属史料館〕
近江史料シリーズ　(7)〔滋賀県立図書館〕
史料が語る城陽近世史　第四集　久津河地域編〔城陽市教育委員会〕
宇治市埋蔵文化財発掘調査概報　第14・15集〔宇治市教育委員会〕
(京都府)向日市埋蔵文化財調査報告書　第28集〔向日市教育委員会〕
(大阪府)池田市史　史料編⑧　畑村関係資料
藤井寺市文化財　第十一号〔藤井寺市教育委員会〕
藤井寺市史　第六巻　史料編四下
(大阪府)門真市史資料集二　大塩事件関係史料2
大阪市史史料　第二十八輯
河内の被差別部落　八尾座の歴史〔安中部落史研究会〕
和泉一国高附名所誌〔森杉夫〕
泉南市文化財調査報告書　第21集〔泉南市教育委員会〕
蘇る海会寺―国史跡指定一周年記念〔同右〕
大阪湾と巨大古墳〔同右〕
大谷女子大学資料館報告書　第21～23冊
泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要Ⅸ
泉佐野市埋蔵文化財発掘調査報告XV〔泉佐野教育委員会〕
日根野遺跡―88・6区の調査〔同右〕
阪南町埋蔵文化財報告　X〔阪南町教育委員会〕
貝塚寺内町―町並調査報告書〔貝塚市教育委員会〕
姫路市史　第12巻　史料編　近現代1
改訂大和高田市史　前・後編
大和国無足人日記　上・下巻〔郡山城史跡柳沢文庫保存会〕
奈良の宝蔵院槍術〔奈良市武道振興会〕
贈従一位　池田慶徳公御傳記　五〔鳥取県立博物館〕
岡山県史　第三・四巻
総社市史　近世史料編
阿波の狼煙について〔西田猛〕
香川県史　索引　総目次(別編1)
香川県歴史の道調査報告書　第2集〔瀬戸内海歴史民俗資料館〕
中村平左衛門日記　第7巻〔北九州市立歴史博物館〕
直方市文化財調査報告書　第11集〔直方市教育委員会〕
佐賀県史料集成　古文書編　第30巻〔佐賀県立図書館〕
佐賀県教育史　第二巻　資料編(二)〔佐賀県教育委員会〕
天正の天草合戦誌〔天草歴史文化遺産の会〕
大分県史　近世篇Ⅳ・現代篇
宮崎県文化財調査報告書　第33集〔宮崎県教育委員会〕
平成元年度農業基盤整備事業に伴う発掘調査概要報告〔同右〕
林遺跡〔同右〕
国衙郡衙古寺跡等遺跡詳細分布調査概要報告書　Ⅱ〔同右〕
九州縦貫自動車道(人吉～えびの間)建設工事にともなう埋蔵文化財試掘調査報告書〔同右〕

(以下次号)

彙報

○平成二年度史料管理学研修会(通算第三六回)の開催

本年度の研修会は、長期研修課程が、前期は平成二年七月九日～八月三日、後期は平成二年九月三日～九月二八日に、国文学研究資料館において開催された。研修内容と講師については、本号掲載の「21世紀の史料保存をになうアーキビストの育成をめざして」を参照されたい。

また、短期研修課程は、平成二年一一月五日～一六日、岡山県青年館において開催される（受講者は既に決定済み）。研修内容と講師は以下のとおりである。

(1)史料管理学序論
当館員　安藤　正人

(2)地域社会と文書館
群馬県立文書館古文書課長　田中　康雄

(3)近世史料論Ⅰ（総論、幕藩史料）
当館員　森　安彦

(4)近世史料論Ⅱ（町方、村方史料）
当館員　浅井　潤子

(5)近現代史料論
中央大学文学部助教授　松尾　正人

(6)史料所在調査法
当館員　渡邊　尚志

(7)近世史料の整理と検索手段の作成
当館員　大藤　修

(8)近現代史料の整理と検索手段の作成
栃木県立文書館副主幹　仲田　凱男

(9)史料の装備と配架
当館員　鶴岡実枝子

(10)史料の利用と情報サービス
当館員　山田　哲好

(11)史料の保存科学
東京芸術大学美術学部助手　稲葉　政満

(12)史料の修復・補修
宇佐美国宝修理所長　宇佐美直八
同所員　田中　保
同所員　宇佐美直秀

(13)岡山大学附属図書館における史料管理
岡山大学附属図書館司書　中野美智子

○評議員会と運営協議員会の開催

本年七月一一日に評議員会が、六月一九日と九月六日に運営協議員会がそれぞれ開催され、管理運営の概況、平成元年度事業報告、平成三年度概算要求、名誉教授称号の授与、次期館長選考、等の議事が評議ないし協議された。

○評議員の退任と新任（敬称略）

退任（本年六月三〇日付）　中井信彦、橋本不美男、松田智雄

新任（本年七月一日付）　有馬朗人（東京大学学長）、井内慶次郎（東京国立博物館長）、尾藤正英（東京大学名誉教授）

○運営協議員（史料部会）の退任と新任

（敬称略）

退任（本年七月三一日付）　尾藤正英、原島陽一、安澤秀一

新任（本年八月一日付）　大口勇次郎（お茶の水女子大学文教育学部教授）、浅井潤子（当館第三史料室長）、鶴岡実枝子（当館第二史料室長）

○定期刊行物の発行

1『史料館所蔵史料目録』第五二集として「越後国頸城郡岩手村佐藤家文書目録」（その三）を、同じく第五三集として「出羽国田川郡大山村大滝家文書目録」を、同第五四集として「陸奥国白河郡踏瀬村箭内家文書目録」（その一）を、来年三月に刊行予定。

2『史料館報』第五三号（本号）を刊行。なお、次号は来年三月刊行予定。

○館内研究会

第一〇九回（平成二年四月一九日）
津田秀夫氏「文書資料の適切な保存・整理・利用を促進するために」の検討

第一一〇回（平成二年六月二八日）
『史料館所蔵目録一覧』増補版の刊行について　山田　哲好
『史料館収蔵史料要覧（仮称）』の刊行に向けて　安藤　正人

第一一一回（平成二年七月三一日）
歴史学関係諸学会懇談会第五回シンポジウム「学術情報問題を考える」に参加して　大友　一雄

○海外出張

安藤正人が、「第三回アーキビスト養成国際シンポジウム」（於オランダ・ハーグ）出席のため、本年九月八日～一四日の間出張。

○海外出張（私費）

安藤正人が、国際文書館評議会（ICA）東南アジア地域部会総会（於マレーシア・クアラルンプール）出席のため、本年七月一八日～二二日の間出張。また森安彦が、第一七回国際歴史学会議（於スペイン・マドリッド）出席などのため、本年八月二〇日～九月一一日の間出張。

○人事異動

◇新任（平成二年四月一日付）
助教授　丑木　幸男
助手　大友　一雄
事務補佐員　長坂　陽子
（平成二年八月一日付）
事務補佐員　毛塚　万里

◇昇任（平成二年四月一日付）
教授　鶴岡実枝子
教授　浅井　潤子
助教授　安藤　正人

◇退職（平成二年七月三一日付）
事務補佐員　長坂　陽子

なお、平成二年七月一一日付をもって、元当館教授安澤秀一氏に国文学研究資料館名誉教授の称号が授与された。

史料館報　第五三号
平成二年（一九九〇）九月三〇日
編集兼　国文学研究資料館
発行者　史料館
〒一四二 東京都品川区豊町一ノ一六ノ一〇
電話〇三（七八五）七一三一㈹
印刷所
東京都台東区寿三ノ一四ノ五
有限会社　スミダ
電話〇三（八四二）七三三三